学位論文の要約

論文題目：自己否定する主体―1930年代「日本」と「朝鮮」の思想的媒介

氏名：KWAK MINSEOK

本稿は、1930年代「帝国日本の思想」を考察の対象とし、その思想の中で「日本」と「朝鮮」という観念が如何に媒介されていたのかを明らかにする。その分析のために、まず序論では、「自己否定する主体」という新たな「主体」の理論を打ち出す。そうすることによって、「主体」と媒介されている観念としての「日本」と「朝鮮」の性格を明らかにし、「自己否定する主体」の契機を中心に「日本」と「朝鮮」の思想的媒介の様相を描いていこうとする本稿の分析方法を定める。

第Ⅰ部は、「帝国日本の哲学」を分析対象としている。第Ⅰ部第1章では、日本の哲学者田辺元（1885―1962）と朝鮮の哲学者朴鍾鴻（1903―1976）の哲学を比較考察することによって、帝国日本―植民地朝鮮の哲学界に存在した「否定」の磁場を描く。まず、いわゆる「京都学派」という思想運動が植民地朝鮮の思想界に与えた影響を概観する。その後「ハイデガー批判」というトポスで共鳴する田辺と朴鍾鴻の哲学的試みを検討する。続いて、社会的存在論の構築に進んだ田辺と朴鍾鴻の哲学がどこで共鳴し、どこで分岐するのかについて論じる。朴鍾鴻は、田辺の「種」概念に内包されている自己否定の契機を取り入れ、特殊民族の問題を思考しようとした。そのような思考の産物として、彼は「ウリ」（＝我々）の哲学という彼独自の思想を編み出していく。第Ⅰ部第2章では、田辺元の「種の論理」を取り上げ、より詳細な分析を行う。まず、田辺の「種の論理」の成立が、彼の民族的な自己認識と強く結びついているということを指摘する。その後、田辺の「種」概念が、個人と否定的に媒介されているものとしての基体の意味から、「自己疎外態」の意味にまで変化していく軌跡をたどることで、「種の論理」の一貫したモティーフを確認する。続いて、田辺の「種の論理」に対する近代主義的な理解やポストコロニアリズムからの解釈を批判的に検討し、「種の論理」を、民族的な分裂を抱えていた帝国日本における民族的な自己認識を試みた哲学として位置づける。第Ⅰ部第3章では、朴鍾鴻の「ウリ」の哲学の生成過程を分析の対象とする。まず、朴鍾鴻が民族意識を自覚するようになった事件に触れ、民族の認識という課題が朴鍾鴻哲学の成立に欠かせない契機であったことを指摘する。その後、彼が三木清（1897―1945）の哲学から受けた影響を検討し、三木哲学の普遍的な図式を克服するために、「階級」と「民族」を同一視する論理を構築していく過程をたどる。最後に、三木哲学を彼なりに克服することで、朴鍾鴻が「自己否定」によって可能になる民族像を打ち立てていく経緯を明らかにする。

第Ⅱ部では、「帝国日本の文芸批評」を取り上げる。第Ⅱ部第1章では、1930年代帝国日本―植民地朝鮮で流行した「不安」をめぐる諸言説を分析対象にし、帝国の思想家や植民地の思想家が、不確かな現実を如何に捉え直そうとしたのかについて論じる。まず、1930年代の「不

安」言説を象徴する言葉にもなった「シェストフ的不安」について紹介する。その後、三木による「不安」理解を検討し、小林秀雄（1902―1983）と戸坂潤（1900―1945）が各々どのように「不安」言説にかかわっていたのかについて論じる。そこで、小林は現実そのものが持つパラドクシカルな性格を主張するのに対して、戸坂は現実におけるパラドクスを理論的に認識しようとしたという、両者の相違が明らかになる。続いて視野を植民地朝鮮にまで広げ、「不安」言説の伝播様相について論じる。特に、三木の危機理論を媒介にして、朴鍾鴻、申南澈（1907―1958）、朴致祐（1909―1949）等植民地朝鮮の思想家たちが、如何に「不安」の現象を捉えていたのかについて検討する。最後に、植民地の思想家たちによる現実に対する認識を検討し、彼らが「闘争」や「対立」を本質的な契機とする現実の概念を哲学的に思考しようとしたことを指摘する。第Ⅱ部第2章では、保田與重郎（1910―1981）の批評を俎上に載せ、イデオロギー的な批判に晒されてきた保田の思想を、内在的な視点から読解することを試みる。まず、保田が批評家としての立場を確立する過程で、朝鮮を訪ねていたことを重要視し、そこで「人工」と「自然」の「イロニー」としての「廃墟」を発見したことについて論じる。保田は、「朝鮮」という観念を経て、やがて「イロニーとしての日本」のイメージを構築していく。保田が後鳥羽院の文芸から導き出した日本文芸における「血統」の観念も、以上で分析した「イロニー」の観念の延長線上で理解することができる。第Ⅱ部第3章では、植民地朝鮮の批評家崔載瑞（1908―1964）の批評を取り上げる。崔載瑞の初期批評における「秩序の文学観」が「個性滅却」の思想に支えられていたことを指摘し、彼の批評における内在的な動機を明らかにする。このような「個性滅却」の思想が、彼の主知主義的な批評理論に一貫して流れていることを論証し、「皇道文学」まで至る彼の批評を一貫した内的な動機から理解することを試みる。

第Ⅲ部は、「帝国日本の（モダニズム）文学」を分析の対象としている。第Ⅲ部第1章では、帝国日本と植民地朝鮮におけるモダニズム傾向を代表する小説家、横光利一（1898―1947）と李箱（1910―1937）の文学を比較考察する。まず、横光が自らの朝鮮滞在の経験に基づいて作品化したいくつかの小説を取り上げ、そこで「泥棒と乞食」として形象化された「朝鮮人」のイメージを検討する。また横光が描いた「朝鮮人」のイメージに自らを同一視することで得られた「言語を蕩尽した浮浪者」としての李箱の自己意識について論じる。続いて横光の「朝鮮」認識に対する李箱の対決意識に焦点を当てる。李箱は、横光が「鳥」で描いた飛翔の成功を受け、「つばさ」における飛翔の失敗をもってそれに対抗しようとした。第Ⅲ部第2章では、川端康成（1899―1972）の文学を取り上げる。1920年代までの川端の文学は、「救ひ」としての「死」の観念にこだわっていた。しかし1930年代に入ってからは、観念的な対象としての「死」を描くのではなく、「死」と「生」を観念的に区分しない姿勢から物事を捉えていく「「死」の存在論」とも呼び得る立場を確立していく。その過程で、川端は「朝鮮」の娼婦たちを描き、そこから、安易な「死」の克服ではない、「うつろな寂しさ」の感覚を導き出す。その後川端は、「父母への手紙」や「抒情歌」などにおいて「「死」への語りかけ」という表現を試み、「禽獣」においては「死顔に化粧」のイメージを通じて生死一如の新しい感覚を捉

えようとする。第Ⅲ部第3章では、李箱の文学を取り上げ、彼において「東京」が何を意味していたのかを明らかにする。まず、「近代」、「脱近代」、「植民地近代」の概念によって解釈されてきた李箱に関する既存の研究を批判的に検討し、「十九世紀」と「二〇世紀」といった李箱自らの用語を用いて、「秘密」という李箱モダニズムの核心的な契機を導き出す。そして、「秘密」の破綻にこそ、李箱が東京に渡っていった真の理由があるということを論証する。最後に、「秘密」の観念は、絶対的な価値への志向と密接に結びついており、李箱において「東京」は、すべての価値の抹消が可能かどうかを試みる実験場としての意味を持っていたことを指摘する。

結論では、「自己否定する主体」の契機を中心にして「日本」と「朝鮮」の思想的な媒介を探求してきた本稿の試みが、新たな「主体」への思考を促し、新たな「日本」と「朝鮮（韓国）」の媒介の道を開くことができるという、本研究の展望について論じる。